

螺子と振り子（改訂）

北村想

登場人物

クレオ（螺子を持った少年）

男1（カンターレタン・オルゴールを持った勤め人）

男2（マチルダの父）

男3（酔っぱらいの詩人）

男4（機械細工の職人）

女1（謎のホームレス）

女2（マンディ・クリスタルという女優）

女3（マチルダという不良娘）

女4（マチルダの母親）

パディオ（クレオの友人）

クルジエ巡査（街の警官）

日本には、文芸童話という文学のgenreがあります。その当時の有名文学者・有名作家が書き下ろした童話です。

そのいくつかは、無国籍童話というふう位置づけされます。

つまり、どこの国の話でもよろしいというワケです。

これは、童話の表現としては、極めて異色のことです。

登場人物の名前こそ、ジョンやメリーや太郎や花子でもいのですが、situationやスタイルは、グローバルなものとして受け取っていいものです。というか、cosmo politanというべきものです。

私は長らく精神病の双極性躁鬱病というものを患っています。

その鬱状態、うつ病のときに、うつ病の時に書ける戯曲とはどんなものになるだろうと、試みて書いてみたのが、この作品です。

しかし、作品（表現）においては、うつ病という精神病は、何の関係もなかったという、そういう結論にいたったというワケです。

といいますか、むしろ、表現というのは、精神病（うつ病）においては、それをうまくコントロールすれば、こういう作品が出来るという実証のようなものがこの作品です。

では、うつ病という精神疾患において、その疾病をコントロールした精神とは何なのでしょうか。

それは、はっきりとはいえませんが、身体というものに刻み込まれた、知覚精神

(脳現象としての精神)とは異なる、身体精神(心的現象としての精神)とでもいえばイイようなものだと思います。

1

簡素な街路燈が、たっている。おそらく、この街には、道路沿いにこういう街路燈があちこちにあるのだろう。

手のとどくあたりにボックスがあつて、そのボックスを鍵で開けると、中にナイフスイッチがある。それを入れれば街路燈が灯る仕組みだ。

さらに、その少し上に、振り子のついた柱時計が時を刻んでいる。それは、街路燈を灯す時刻を報せるための時計だ。

もう、夕刻だ。たぶん、決まった時間になれば、誰かその役目の者が、スイッチをいれに来るのにちがいない。

ほら、やってきた。

カスケツト帽子を被った少年が、踏み台を持ってやってきた。

彼は、ポケットから、懐中時計を出して、柱時計と照らし合わせ、時刻をたしかめると、その街路燈に近寄った。それから、鍵でボックスを開け、ナイフスイッチをいれると、踏み台に乗って、時計の発条(ぜんまい)を螺子(ねじ)で巻いた。

それで、街路燈は、明るく輝くと、夕闇の濃い、とかく不安げになりやすい世界を、夜をむかえる明るいシルシのように照らしはじめた。

少年は、しばらく、その明かりの下に立って、時計が正確に動くのをみていた。

これでよし。

少年はうなずいた。

さて、そこに、トランクを下げた、いくらか金持ちの勤め人ふうの紳士が現れた。

男1 きみ、その時計は正確かね

少年 はい、いま合わせたばかりですから、正確ですよ

男1 (懐中時計を取り出すと) そうか。じゃあ、その時計に合わせておくか。いや、どうもこのウォッチは、寿命のようだ。一日に三分ほどすすむようだ。

少年 どの品ですか。

男1 つい最近、骨董市で買ったものだよ。オルガメットか、セクラスか、みつけて手にしたときは、なかなかの品物のように思えたのだが、やはり、骨董品だな。油のまわりがよくないようだ。

少年 ぼくの時計は国産ですが、去年、誕生日のお祝いに買ってもらったばかりのものですから、ずいぶんと正確ですよ。毎日、うちの大時計に合わせてますから、くるってなんかいませんよ。僕の自慢の時計なんです。うちの大時計はクロン社のものですか。

男1 ずいぶんと明るいが、その街路燈に明かりを灯すのは、きみの役目なのかね。

少年 ええ、そうです。僕の仕事なんです。べつに、お金をもらってるわけではありませ

んが、今年一年は、この街路燈に明かりを入れるのが僕の仕事になってるんです。

男1　すると、その時計の発条（ぜんまい）を巻くのも、きみの役目だね。

少年　ええ、そうですよ。

男1　じゃあ、そのための螺子（ねじ）を持ってるね。

少年　この柱時計のですか。ええ、持っています。

男1　ちよつとみせてもらえんかね。

少年　みせるくらいなら、そりゃあ、おみせもしますが、これは、預かりもので大切なものですから。いったいどうするおつもりなんですか。

男1　うん、それはわかってるよ。実は、その骨董市で今日は、チアース社のオルゴールを買ったんだがね、いやあ、そのオルゴールには螺子がついてなくてねえ、外見は、質素なつくりで、たいへんにデザインが気に入って買ってしまっただが、いざ、音を聞こうという段になって、螺子のないのに気がついたんだ。

少年　骨董品がお好きなんですか。

男1　好きだねえ。趣味というやつだな。

少年　（螺子をポケットから出して）これですけど、オルゴールは何処にあるんです。

男1　いま、出すから、待ってておくれ。

男は、トランクを開けると、四角い箱を取り出した。

男1　ほら、これだ。シンプルなデザインだろう。私はこういうシンプルなもの大好きなんだよ。

少年　音を聞いてみなかったんですか。

男1　そう、あんまりデザインが気に入ったものだから、衝動買いしてしまったんだ。

少年　この螺子で合いますか。

男1　どれ、ちよつと。（と、螺子を受け取る）さあ、どうかな。こんなものは、どれもこれも似たようなものだから、（入れてみる）ああ、少しきついが、なんとか合いそうだぞ。もうちよつとだ。入りそうだ。よし、いいぞ。

螺子を巻いてみる。

男1　よし、巻けるまける。巻けるにはまけるが、やはり、少し、キツイな。

少年　無理しないほうがいいですよ。

男1　うん、巻けたまけた。

少年　どんな曲なんですか。

男1　だから、私も、今日このいま、初めて聞くわけなんだ。

ふたりは、オルゴールの歌うのを待ったが、いつまでたっても、オルゴールから、メロディのひとつも流れない。

少年　歌いませんね。

男1 鳴らないな。

少年 螺子もどらないんですね。止まったままですよ。

男1 (螺子に触れるが) 動かんぞ。ぴくりともせん。

少年 やっぱり、螺子が合わなかったんじゃありませんか。

男1 そうだね。あれっ。

少年 どうしました。

男1 螺子がとれない。

少年 抜けないんですか。

男1 いや、なんとかか。うーん・・こりや、かたい。

少年 ああ、無茶しないで。僕がやってみましょうか。

男1 (オルゴールを渡す) 壊さないようにしてくれよ。

少年 ええ。(やってみるが) 駄目みたいです。

男1 よし、もう一度、私が。

少年 力まかせにしないでくださいよ。螺子を壊しちゃタイヘンです。

男1 そりゃあ、私だって、オルゴールを壊したくはないからな。(やってみるが) ああ、こりや、駄目だ。

少年 無理に差し込んだからですよ、きっと。

男1 困ったことになったな。

少年 困るのは僕のほうですよ。

男1 修理しないといかんようだ。しかし、隣の街まで行かないと、オルゴールの店はなから、きみ、ここで、待っていることはできるかい。

少年 それは、できません。その螺子は、僕のもの、いえ、タイセツな預かりものなんです。僕がずっと持っているのと駄目なんです。

男1 じゃあ、隣の街までついてくるかい。

少年 いまから、隣の街になんてついていけませんよ。こんな時刻だし。

男1 じゃあ、きみ、どうすればいいというんだ。

少年 誰か、修理できるひとを捜してきて下さい。僕はオルゴールと一緒にここで待ってますから。

男1 そうか、仕方無い。じゃあ、そうすることにしよう。きみ、ほんとうに待っていてくれたまえよ。

少年 はい、ここにいます。

男1 きみ、名前は。

少年 クレオです。

男1 クレオくんだね。

少年 あなた、お名前は。

男1 カンターレンタンだ。

少年 カンターレンタンさん。

男1 じゃあ、夜になる前に急いでいってこよう。馬車をとばしていけば、暗くなるまでには、なんとかなるだろう。(去る)

少年クレオは時計をみて、オルゴールを抱え、街路燈の下の踏み台に座り込んだ。と、傘に大きな紙袋を持った、ホームレスらしき女がやってきた。クレオをじっとみている。

女1 坊や。

クレオ えっ。

女1 そこで、何してるんだい。

クレオ 何をといつて、どういえば、いいかな、ああ、あの、ひとを待ってるんです。

女1 いつまで。

クレオ もちろん、そのひとが来るまでです。

女1 そうすると、そのひとか来さえすれば、おまえは、その場所から退いてくれるんだね。

クレオ ええ、もちろんです。この場所が、何か。

女1そこはね、私の寢床なんだよ。

クレオ 寢床。

女1 寢床だよ。わからないかい、私は、今夜、そこで寝るんだよ。

クレオ こんなところでですか。

女1 そう。そんなところでだよ。

クレオ 何故です。

女1 ところが、私の寢床だからだよ。

クレオ ここで、いつも。

女1 そう。あのね、誰がそんなことを決めたの、なんて聞くんじゃないよ。私だって、

家さへあれば、おまえのように、家さへあれば、その家の暖かいベッドで眠りたいのはやまやまなんだ。ところが、そうもいかない身分でね。そこが私のベッドなんだ。

クレオ 家がないんですか。

女1 あれば、そんなところを寢床になんかするもんか。まさか、坊や、おまえは家はあ
るんだろうね。

クレオ もちろん。ソートン通りの28番地です。

女1 住所まで聞いてやしないさ。じゃあ、早くそのお家にお帰り。ああ、そうか、ひと
を待ってるといったね。そのひとは、いつ来るんだい。

クレオ たぶん、隣の街までいってるんです。ですから、しばらくはかかると思います。

女1 そうかい、しばらくはかかるんだ。それまでは、おまえは、そこに陣取って、動か
ない決心をしているのかい。

クレオ そんなかない決心をしているわけではありません。

女1 さて、考えようかね。その、おまえが待ってるひとが、やってきて、おまえが、そ
の場所を私に明け渡してくれるのを待つか。そうなれば、私は、街をもう一巡りして
きたってかまわないんだけど、ところが、私は今日は少し疲れてしまっているんだ
だから、

いつもより早く横になりたいと思っっているんだ。ねえ、坊や、その場所を私にゆずつ

てくれるだけの、度量があるかい。

クレオ 度量だなんて、僕は、この辺りで、そのひとを待っていればいいだけですから、いますぐにでも、この場所を空けますよ。

女1 ありがたいことをいってくれるね。じゃあ、そうしておくれ。
クレオ (立ち上がって、場所を少し移動した)

女1 (毛布を敷きながら) おまえさんさへかまわなければ、私の枕元でも足下でも、好きなところに座ってたっていいんだよ。でも、おまえさんは、こんな汚いおばさんと一緒にいるのはいやだろうね。

クレオ いいえ、汚いだなんて思ってやいません。

女1 嘘をついてはいけないよ。

クレオ ああ、あの、少しくらい汚れてたって平気です。僕はまだお風呂に入ってませんから。

女1 そういうコトバは、つつしむがいいよ。

クレオ えっ、何をつつしむんですか。

女1 私の前で、お風呂とかいう楽園の名詞を口にするのだよ。

クレオ お風呂がいけなかったですか。でも、楽園というのは、どうしてなんです。

女1 女の私はね、男どもとちがって、カムズ河の浅瀬で水浴としゃれこむこともできやしない。もうすっかり春だし、毎日、夏に向かってこんな日がつづく、さすがに汗っかきでない私でも、汗が背中や胸のあいだに、つたうのさ。それでも、お風呂と
いうわけにはいかないね。

クレオ すいません。

女1 私だって、毎日お風呂に入る生活というのをやってたさ。こんなふうになるまではね。しかし、いまじゃ、夜中誰もいなくなった頃、街角や広場にある噴水の水を汲んで、それで身体を拭くのがせいっぱいさ。さあ、座りたいのなら、お座り。

クレオ はい、では、失礼して。

女1 なんだって、こんなところで、今頃の時間、ひとを待ってるんだい。年頃からみても、いいひとが来るのを待ち合わせているようでもないようだし。

クレオ ええ、実は、僕は、この街路燈に明かりのスイッチを入れるのと、この柱時計の発条を巻くのが仕事なんです。

女1 ああ、いつもおまえさんが、この電灯を灯してくれているんだね。そいつは感謝だね。おかげで、電気代を払うことなしに、私は夜中じゆう、ずっと読書だってできる。
クレオ その、発条を巻く螺子があるんですが、それが、ふとした事故で、オルゴールの箱につきささったままになってしまったんです。

クレオは、オルゴールを女にみせた。

女1 つきささったって、ああ、抜けなくなったということかい。誰がこんなことをしたんだい。

クレオ 勤め人のカンターレンタンというひとなんです。そのひと、骨董品が趣味で、このオルゴールを買ったらしいんですが、螺子がついてなかったので、この柱時計の発

糸を巻く螺子を貸してくれて、そう、僕に頼んだんです。

女1 それで、巻いてみたんだね。(抜こうとするが)それが、こんなふうには抜けなくなっちゃったというわけかい。

クレオ そうなんです。

女1 すると、おまえは、そのカンターレンタンを待つてるんだね。きっと、機械職人を捜しにいったんだろう。

クレオ ええ、そのとおりです。

女1 (オルゴールの箱を調べるように熱心に触ってみていたが)このオルゴールは、からくり箱になっているね。

クレオ なんですか、そのからくり箱というのは。

女1 モノが隠せるように、あげ底になっているってことだよ。たいせつなものを、そこに隠しておくのさ、宝石やら、現金をね。

クレオ そんなふうになってるんですか。

女1 長く生きているとね、そういう知識だけは、たまってくるんだ。ほら、開いた。やっぱり、からくり箱だ。

クレオ 何か、入ってますか。

女1 指輪が五つも出てきたよ。ダイヤが二つとルビーにサファイア、エメラルドだ。このカラットからすると、ずいぶんの値打ち品だね。カンターレンタンは、このことを知ってなかったとみえるね。(オルゴールを渡す)

クレオ (受け取って、中をみる)ほんとだ、宝石だ。カンターレンタンさんは、ほんとにこのことを知らなかったんでしょうか。

女1 知ってりや、おまえに預けたりなんかするもんか。

クレオ どうでしょう、この宝石。

女1 おまえも、知らなかったことにしておくといいさ。元どおりに蓋をしておけばいい。

しかし、おまえ、いやなものを預かったね。面倒にまきこまれなきやいいが。(紙袋から、サラミらしきものを取り出すと、果物ナイフで切り取り、そのまま口に運んだ。それから、もう一キレ切ると)食べやしないだろうね。

クレオ (頷く)

女1 腐ってなんかいやしないよ。

クレオ 僕は、晩ごはんがありますから。

女1 いいさ、どうでも。(また一口食べた)

クレオ あの、

女1 なんだい。不思議そうな顔をしてるね。私が、宝石に興味をしめさなかったのが、そんなに不思議なのかい。

クレオ いえ、でも、カンターレンタンさんが知らないのなら、

女1 おまえとふたりで、頂いてしまえばいいってかい。

クレオ いえ、僕はそんなことできません。

女1 じゃあ、私なら、できる。いや、そうするんじゃないかと思ったんだねおまえは。

クレオ いえ、そんなふうには、

女1 少しは思っただろ。

クレオ 正直に言えば。

女1 私が、このからくり箱の中の宝石を頂いて、だまってすめばそれでもいい。ところがね、坊や。世の中の仕組みというヤツは、けしてそんな上手い具合にはなっていないもんなんだよ。そんな上手い話があるのなら、私は、こんな生活なんかしてやしない。そりゃあ、この宝石をいただけば、私はお風呂にだって入れるだろうし、天蓋付きのベッドのある、豪華なホテルにだって泊まれるだろうさ。

クレオ そう、したくはないんですか。

女1 いいかい、私はね、面倒なことが嫌で、こんな生活をしてるんだ。気ままいいんだよ。そんな私が、わざわざ面倒に巻き込まれるようなことをすると思うかい。このからくり箱に入っていたのがただの石っコロでも、そっと元にもどしておくのがいい。面倒というのはね、こういうところから、いつも、こんな具合にひよっこり飛び出してきたては、人間を巻き込んでしまうものなんだ。ほんの些細なことで、人生というのは狂ってしまうものなんだよ。いつも、面倒の始まりは、ほんの小さな出来事なんだからね。

クレオ はい。

女1 そんなことは、歳をとればわかってくることだけだね。坊や、歳は。

クレオ 十五です。

女1 そうかい、じゃあ、良かったね。早くにそういうことを教えてもらって。

もつとも、他人の教えというのは、身につかないことのほうが多いんだけどね。

クレオ あの、あなたはお幾つなんですか。

女1 歳を聞かれたときは、四十五だと答えることにしている。というのも、四十五から数えてないからね。数えるのをやめたのさ。歳なんて数えたって、数えなくなたって、やがては終わるんだからね。七十数えようが、七十五を数えようが、あんまり意味はないね。歳なんざ、ほんとは、ひとつでいいんだ。ひとつ。わかるかい、ひとつってことが。

クレオ 人生は一回ってことですか。

女1 利口な子だね。まあ、そういうことさ。命はひとつ。ひとつさ。それで充分さ。人間は、一回生まれてくる。そうして一回死ぬ。そういうことさ。

クレオ あの、

女1 次の質問は、私がどうして、こんな暮らしをしてるのかってことだろ。

クレオ ええ、そのとおりです。でも、なぜです、どうしてわかったんです。僕の聞いたことが。

女1 こんな女に、財産はどれくらいお持ちで、とか、現在の恋人は、とか聞くヤツがいるわけがないだろう。

クレオ でも、ちょっと、いわせてください。僕は、なんだか、あなたをとて誤解していたようなんです。

女1 誤解。

クレオ ええ、はい。最初は、すいません、ちょっと汚い乞食女だと思っただけです。

女1 それは誤解じゃなくて、おまえの観察能力が、人並みだったからさ。私はそのとおりの乞食女だよ。

クレオ いいえ、でも、なんだか、とても違うような気がしてきました。

女1 どこかの尊いお方が、身をやつしているようにみえてきたのかい。

クレオ そんなんじゃないんです。さっきの宝石のことやら、いまの話やら、僕はほんとは恥ずかしく思ってます。ひとを見かけで判断しちゃいけないんだと思いました。

女1 (ちよっと笑った)それはね、見かけじゃ判断できない人間も、世の中にいるというのをいつてるんだよ。たいていの人間は、見かけどおりだよ。

クレオ 僕は、いま、ですから、とても、あなたに興味を、こういう言い方は失礼でしょうか。興味を感じます。

女1 いいことだね。おまえの歳だと、自分以外の人間に興味を持つことはあまりないことだからね。ひとは、ずっと自分自身に興味を持っている。知らないかもしれないが、自分の中に世界というやつがあるからね。だけれども、自分以外のひとにも、自分と同じ世界があるんだと気がつくときがある。そのとき、そのひとは初めて、自分の中の世界から一歩外に出ることになるんだよ。この一歩は簡単そうでほんとうはずいぶんと、難しいことなのさ。それに、とっても怖いことだ。だから、勇気のいることなのさ。

クレオ なぜ、それは、怖くって勇気のいることなんですか。

女1 誰だって、自分以外は他人だからさ。他人を自分のように思うということは、コトバを変えていえば、そのひとを愛するということになるからね。どんな人間も愛には臆病だ。ひとを愛するには、だから、勇気がいるのさ。

クレオ ひとを愛するというのは、自分の世界から、一歩踏み出すことなんですかね。

女1 えらいね、坊や。あと三年、それをおぼえていられたら、もっと偉いんだがね。

クレオ できるだけ、忘れないようにします。

女1 坊や、おまえは、この街路燈に明かりをいれて、それから、柱時計の発条を巻くのが、仕事だといったね。

クレオ そうです。でも、それでお金をもらってるわけじゃありません。街の決まりなんです。今年一年は、僕がそれをやるんです。

女1 この世界は、ちよつどその螺子と振り子で出来ているといつてもいい。

クレオ えっ、なんとおっしゃいました。

女1 耳が遠くなるには、まだ若すぎるだろう。この世界は、ちよつどその螺子と振り子で出来ていると、いったんだよ。

クレオ ええ、そう聞いたんですが、この世界が螺子と振り子だつていうのは、いったいどういうことなんですか。

女1 螺子を巻くと、発条はどうなる。

クレオ ギュツと縮んでいきます。

女1 エネルギーが蓄積されるんだ。中心に向かって、エネルギーがかたまっていく。そうして螺子はもうそれ以上巻けないところまで巻かれたら、後は、発条の反発力によってエネルギーが発散されていく。そのとき、螺子はどうなる。

クレオ そのままにしておけば、反対側に回転します。

女1 そうだね。蓄積されたエネルギーとほとんど同じエネルギーが解放されていく。

そのときの制御は、コントロールがきわめて難しいだろう。わかるかい、十五歳。

クレオ はい、なんとなく。

女1 螺子を巻いて、エネルギーを蓄積しているのが、ちょうど、自分自身の世界へ入り込んでいく、その譬えだとすると、螺子が反対に回転して、エネルギーが解放されていくようすは、外の世界に踏み出した状態と同じさ。

クレオ コントロールが難しいんですね。

女1 そう。さてと、ここではそれが、柱時計の振り子に伝わる。振り子は、右にゆれ、左にもどる。左にゆれ、右にもどる。この振動の繰り返しだ。振動というのは、エネルギーの本来の姿なんだよ。振れ動くこと、これがエネルギーさ。すべてのものは、この振り子のように振動している。世界は、素粒子のような、極微の細かさから、無窮の宇宙の巨きさまで、このエネルギーを生命の源にしている。だから、螺子と振り子をみることは、この世界の本质をみているのと同じだよ。螺子と振り子のように、世界は動くんだ。

クレオ (驚嘆している) おばさん、あなたは、いったい、誰なんですか。

女1 私の過去を話したら、おまえの未来が蔷薇色に変わると思うかい。

クレオ いいえ。

女1 私は、いまおまえの螺子を巻いてやったのさ。おまえという振り子がこれからどう動くのか、それはわからないけどね。

クレオ はい。

女1 さあ、少し私は疲れたようだ。もう横になろう。待ち人は、いまだ来たらずだね。

クレオ ええ、(と、時計をみる)

女1 (覗き込んで) その時計は、日に曜日まで、小窓に出るんだね。

クレオ はい。最新型です。

女1 待てよ。今日は、15日の水曜日じゃないか。

クレオ ええ、そうですよ。

女1 坊や、おまえちよっと、ここで、私の荷物の番をしておくれでないか。

クレオ えっ、何処かへいっちゃうんですか。

女1 ヒルマン通りのマーケットの棚卸しだよ、今日は。いまから並ばなくちゃ、いいものは手に入らない。私としたことがうっかりしていた。これは、疲れたなんてこといつてられやしないよ。

クレオ そんなにタイヘンなことなんですか。

女1 食料から衣類まで、殆どタダ同然で手に入れられる。運が良ければね。

クレオ 行くんですか。

女1 ああ、いいかい、この荷物の番を頼んだよ。

クレオ でも、

ホームレスの女、あわてて、行ってしまった。

クレオ ああ、待って、ちょっと待って。

また、ひとりになった、少年クレオ。しょうがなく、柱時計をみたり、電球を透かしてみたりしながら、また、その場にしゃがみこんだ。が、すぐに立ち上がって。

クレオ いやいや、こんなところでゆっくり休んでる場合じゃないぞ。困ったことになったな。ここだけじゃないんだ街路燈は、他にもあるんだ。タイヘンだ。エライことになってしまったな。(行こうとするが) ああ、でも、荷物の番を頼まれちゃったし、それに、時計の発条を巻く螺子が、このとおりだし。どうしよう。どうしたらいいんだろ。

途方にくれて頭を抱える

クレオ 日がまったく落ちる前に、他の街路燈に明かりをいれなくっちゃいけないというのに。えーと、あと、いくつ残ってるんだ。(数える) あと、五つもあるぞ。(荷物をあとにして、行こうとするが)

女 (声だけ) いいかい、この荷物の番を頼んだよ。

クレオ (頭を抱える) どうすればいいんだ。

軽装だが、小奇麗な恰好の女が、早足で、やってきた。

クレオ あの、

女2 (立ち止まりざまに、振り向いて) えっ、私のこと。

クレオ はい。ちよっとお聞きしたいんですが。

女2 なにかしら、なんでもいいけど、手短にね。

クレオ 急いでらっしゃるんですか。

女2 とくにというわけではないけど、これから、仕事なの。

クレオ 実は、僕も仕事の最中なんです。

女2 そう。で、御用はなあに。

クレオ ここから、先の通りは、もう暗いんじゃないでしょうか。

女2 そうね、もう夕方だから、薄暗いわね。

クレオ 街路燈が、あるでしょ。

女2 ああ、あるわね。そういえば、いつもなら、もう灯ってる時刻ね。

クレオ それ、僕の仕事なんです。

女2 それって。

クレオ 街路燈に明かりを灯す仕事、それが僕の仕事です。

女2 あら、そうなの。それで。

クレオ それで、そうしたいんですが、つまり、燈を灯したいんですが、事情があつて、

ここを離れることが出来ないんです。

女2 まあ、それは、困ったわね。あの街路燈が灯らないと、通りは夜の暗さに勝てそうにないものね。

クレオ 少しでいいんです。この荷物の番をしていてくれませんか。そうすれば、僕は街路燈に明かりをとすことだけは出来ます。

女2 うーん、困ったわねえ。さっきもいったように、私もいまから仕事なの。

クレオ それは、よくわかっています。

女2 舞台があるの。クレソン通りのシアターで、『まぼろしの音楽隊』というミュージカルをやってるでしょ。

クレオ ああ、ええ、看板をみました、この前。

女2 端役なんだけど、やっとなりついた仕事なの。遅刻したら、明日からおはらいばこになってしまうわ。

クレオ そうでしょうね。すみません、呼び止めて。(うなだれる)

女2 (柱時計をみると) その時計は正確。

クレオ ええ、いま合わせたばかりです。

女2 五分でいってこれる。

クレオ 五分ですか。五分じゃ無理だ。

女2 じゃあ、残念ね。

クレオ はい。すみません、お時間をとらせて。

女2 誰か、べつのひとに頼めば。

クレオ はい、そうします。

女2 じゃあ。

アクトレスであるらしい女は、早足で去った。

4

すると、どこから出てきたのか、また女がひとり、ニタニタ笑いをしながら、クレオ少年に近づいてきた。ここいらへんにいる、不良娘のひとりだ。

女3 ねえ、クレオくん。

クレオ えっ、誰。

女3 マチルダっていうの。マチイって呼んでいいわ。

クレオ マチイさんが、どんな用事です。

女3 ふふ、イライラしちゃって。

クレオ なんなんです。からかいに来たんですか。

女3 あわてないでよ。あたい、あんたを助けてあげようと思ってんのよ。

クレオ 助けるって。

女3 困ってんでしょ。

クレオ ええ、そりゃ、まあ。

女3 あたい、みてたの、ずっと、あのゴミのための向こうから。

クレオ みてたって。

女3 あたいさ、この街路燈に興味があつてさ、いつ誰が、このスイッチをいれるんだろ
うって、いつも、みてるのよ。

クレオ そう。

女3 だから、いつもあんたのこと、みてたんだ。

クレオ そうなの。

女3 今日もみてたわ、あんたが、ここの街路燈に明かりをいれるときから、ずっとね。

クレオ それで。

女3 だから、困ってるってことも知ってるっていうことよ。

クレオ すると、あの、

女3 ちよいまち。あのね、あたい、あんたの代わりに、ここで、乞食女の荷物の番なん

かするのはゴメンだわよ。

クレオ じゃあ、助けるって、どういうこと。

女3 あたいが、代わって、スイッチを入れてきてあげるってこと。

クレオ それは、駄目だ。

女3 あら、どうしてよ。

クレオ それは、僕の仕事だから。

女3 あなた、頭カタイのねえ。せっかく、ひとが親切でいってやってるのにさ。

クレオ でも、

女3 夜が来るわよ。通りは、真っ暗け。それでもいいっての。

クレオ だったら、この荷物の。

女3 あたいはスイッチが入りたいのよ。だから、貸してよ。スイッチのボックスの鍵。

あれがないと、ボックスが開けられないでしょ。ね、なんだって知ってるのよ。イタ

ズラ防止のために、ボックスに鍵がかかっていることもね。

クレオ それは、渡すわけにいかないよ。

女3 だったら、乞食女の荷物なんか放っておいて、あなたがいけば。そのあいだに、あ

たいは、その乞食女の紙袋を、河に捨ててきてやるから。

クレオ どこが、親切なんだ。

女3 親切よ。でも、タダというわけにはいかないの。ほんとうは、いくらか小銭をもら

いたいところなんだけど、あたい、一度でいいから、街路燈を灯してみたいんだ。だ

から、そうさせてよ。その代わり、あんたは、あたいに、スイッチのボックスの鍵を

渡すの。

クレオ そんなことをすれば、明日っから、きみがイタズラするかも、しれやしないじゃ

ないか。

女3 ほほう、頭カタイだけじゃなくて、けっこう頭イイのね。でも、それは、大丈夫。

なんでなら、明日っから、あたいはもうこの街にいないから。

クレオ 街にいないって。

女3 引っ越すのよ。母親と母親の三番目の亭主と一緒に、べつの街におさらばするの。

だから、いってみれば、この街にいる最後の記念に、街路燈に明かりを灯したいの。

クレオ ほんとに。

女3 ほんとよ。引っ越しなんて、明日が初めてじゃないわ。母親の男が変わるたんびに

引っ越してきたんだから。もう、何度めかしらねえ。ああ、いいのよ、同情なんてし

てもらわなくていいの。あたいは、全然かわいそうじゃないのよ。なんでなら、あ

たいは、そういう生活を楽しんでるんだから。そういう暮らしが面白くていいのよ。でもね、ちよつとは淋しいのよ。だから、毎度の引越しのときには、何か記念になることをしてからその街を去るの。この前んときは、街の議会の窓に石を投げて、窓という窓のガラスをみいんな割ってやったわ。その前は、レストランのメニューを上から順番に全部頼んで、出前で持って寄越すように電話して、もちろん、あたいんところでなく、日頃からお世話になった、お巡りのいる交番へね。だから、それに比べれば、今度のことは、わりにステキな記念になると思うの。さあ、鍵は。

クレオ ほんとに、いまいったことは、ほんとなんだらうね。

女3 母親のお墓に誓うわ。

クレオ 母親は生きてるんだろ。

女3 もちろん、最初の母親のお墓によ。いまの母親は、えーと、まあ、いいじゃない、そんなこと。ほらほら、夜はもうそこについて、この街を闇の中につつまこむの手ぐすねひいて、待ってるわ。

クレオ わかった。じゃあ、信用する。鍵はこれだ。(投げて渡す)

女3 (受け取った)

クレオ 場所はわかってるのかい。

女3 毎日みてるっていったでしょ。

クレオ じゃあ、頼むことにする。

女3 そう、ようし、では、出発するか。残りはあと五つでしょ。まかしといてよ。

クレオ お願いするよ。

女3 されたわよ。じゃあ。

行きかけて、振り向くと。

女3 ありがと、信用してくれて。きっと、ステキな思い出になると思うわ。

クレオ ああ、そうなればいいね。

女3 そんなに悲しい顔しないでいいのよ。今日だけなんだから。あんた、きっと運が、運が、運が・・・そうね、きっと良かったのよ。

クレオ 終わったら、鍵、持ってきてね。

女3 はい。

行った。

見送っているクレオ。

5

と、さっきの女優が現れて、肩を落として、クレオの後ろに立った。

女2 荷物の番、できそうよ。

クレオ えっ、あつ、あなたさっきの。

女2 マンデイっていうの。マンデイ・クリスタル。ミドルネームは、ニコラスよ。

クレオ マンデイさん、荷物の番が出来そうって、仕事はどうなったんです。

女2 だから、なくなったのよ、仕事。

クレオ どうしてです。

女2 おまえは、夏の湯タンポだっていわれたわ、支配人に。

クレオ 夏の湯タンポ。

女2 使い道がないってことよ。私はね、あのミュージカルのコーラスガールを担当しているの。それが、支配人のコネだから、今晩ひとり、新しい女のこが来たらしいの。だから、おほらえばこよ。荷物の番しててあげるから、電灯でもなんでも、灯してくれば。

クレオ それが、いま、ある女の子に頼んじゃったんです。

女2 あら、そうなの。ここでも役たたずってわけね。

クレオ ごめんなさい。

女2 あなたが、あやまることはないわ。キッチンと契約書を書かなかった私がいけないのよ。

クレオ お気の毒に。

女2 まあ、いいわ。失業するのは、これが初めてじゃないから。失業のベテランよ私なんて。年がら年中、失業してるんだから。

クレオ 女優の仕事ってタイヘンなんですね。

女2 どんな仕事も楽じゃないわ。

クレオ ええ、僕もそう思います。僕なんか、通りの街路燈のスイッチを入れて、時計の発条を螺子で巻くだけの仕事なのに、今日は、それも出来なくて、なんだか、タンヘンだなあと思ってるくらいなんですから。

女2 その荷物、あなたのじゃないんですよ。

クレオ はい。ここを寢床にしているホームレスのおばさんのものなんです。

女2 お人好しね、あなたも。

クレオ そうですか。

女2 そんなもの、預かったりなんかして。

クレオ いえ、それはいいんです。だいたい、元はといえば、僕が、カンターレントンというひとのオルゴールに螺子を貸したのが、マチガイの始まりだったんですから。

女2 オルゴール・・・その箱、そうなの。

クレオ ええ、そうなんです。この螺子は、この柱時計の螺子なんです。それが、オルゴールに使おうとして抜けなくなつて、もし、このままだと、街路燈についてる時計は、今夜中にみな止まってしまいます。

女2 カンターレントンさんは、どこに。

クレオ 職人さんを捜しに、隣の街まで。

女2 それで、ここで待ってたのね。

クレオ ええ。そのときは、街路燈の明かりのことなど、まだ五つ残ってるんですが、すっかり上の空で、忘れてしまっていて、螺子のことばかりが気がかりだったものですから。でも、明かりのスイッチは、いま親切な・・・たぶん、親切だと思うんですけど、女の子に頼んだから。

女2 オルゴール、みせてくれる。

クレオ ええ、いいですよ。でも、ウンともスンともいいません。

女2 ほんとうだ。螺子が少しも動かない。抜けもしないわ。

クレオ ええ、だから、困ってるんです。ああ、カンターレンタンさん、早くもどつて来てくれないかなあ。

女2 (オルゴールに耳を近づけて) ねえ、これって壊れてるんじゃないの。

クレオ えっ、どうしてです。

女2 何か、コロコロって転がる音がする。部品が外れてるんじゃないのかな。

クレオ ああ、きっと、それ、宝石ですよ。

女2 宝石、なんのこと。

クレオ そのオルゴール、からくり箱だか、かくし細工だか、二重底になって、その中に宝石が入ってるんです。五つあったから、そのうちひとつが、留め口を外れて転がってるんですよ。

女2 宝石が五つだなんて、そんな大切なものを、カンターレンタンさんは、あなたに預けたまま、隣街へ。

クレオ 知らないんですよ、カンターレンタンさんも、宝石のことは。さっきまでここにいた、ホームレスのおばさんが、みつけたんです。だから、カンターレンタンさんがもどつてきたら、教えてあげようかとも思うんですけど、おばさんは、だまつてろつて行ってたけど。

女2 へーえ、そう。きっと、その乞食おばさんは、宝石をいただくつもりなのね。

クレオ いえ、そんなひとじゃありません。宝石なんかに興味はないって言ってました。

女2 そんな人間なんていやしないわよ。みてみたいわ。どうやったら、その箱の蓋が開けられるのかしら。

クレオ (オルゴールを受け取ると) このへんを押ししたりしてたけど。あ、ほら、蓋が開きました。

女2 (オルゴールを取り上げて) まあ、ほんと、宝石だわ。ほんものかしら。転がって音をたてていたのは、このダイヤね。(指輪を取り出す) すごい、大きなダイヤの指輪だわ。こんなもの、私が一生歌いつづけても、私の指には輝かないんだろうなあ。(はめてみる) まあ、サイズもピッタリ。

クレオ ずいぶんの値打ちモノだって、おばさん、いつてましたよ。

女2 そりゃ、そうよ。これだけ大きいんですもの。

クレオ 僕には、よくわかりません。

女2 あなたはまだ子供だからよ。ねえ、えーと、

クレオ クレオです。

女2 クレオくん、私が昨日まで出演してた、『まぼろしの音楽隊』のことを話してあげようか。

クレオ ええ。でも、いきなり、どうしてですか。

女2 こんなにステキな指輪をしたら、なんだか、さっきまで落ち込んでいた気分が、雲の上まで昇っちゃって、ダンスしはじめたからよ。

クレオ へーえ。

女2 あのね、戦争をしている国があるのよ。たいしたこといがみあつてゐるわけじゃない、信じている宗教が違つたり、民族が違つたり、そんなことでも人間というのは、銃を持って殺しあいをするものなのよ。宗教なんてものは、信じているひとの数だけあるんだし、民族は、一種類になることなんて絶対ないのに、そんなことで、戦争をするものなのよ。それでね、森の中で、戦闘が始まるの。アルジャという国の男の兵士と、ナルジェという国の女の兵士も、そこで闘っているの。ところが、生憎の深い霧で、ふたりは隊列をはぐれて、迷子になってしまうの。そこで、森をさまよつたあげくに、霧がはれたと思つたら、奇妙な村にふたりは入り込んでしまうの。ふたりはもう、飢えと疲れでいまにも死にそうなの。その村人は、銃はおろか、魚や鳥をさばくためのナイフ以外に、あぶなつかしいものは持っていないの。その代わりに楽器をいろいろ持っていて、それを演奏するのが、村人の楽しみなの。男の兵士と女の兵士は、その村人に命を救われることになるんだけど、元氣になつてから、村人たちに勧められて、楽器を演奏したり、歌つたりする稽古を始めるのよ。村の音楽隊の仲間入りをするわけ。そこで、毎日、練習して、それで、村の祭の日に、立派にふたりとも、楽器を奏で、歌声を響かせる。ふたりは、やがて恋をしてしまうわ。でも、そうこうしているうちに、ふたりの前から、村は霧の中にまた消えてしまうの。ふたりは、森の中で、互いに銃を構えて立っているのよ。いままでのことは、まぼろしだったのか、夢だったのか、わからない。しかし、ふたりは、元の敵どうしにもどつてゐるの。

クレオ それで、どうなるんです。

女2 最後に、銃声が森にこだまして、お芝居は幕を閉じるわ。

クレオ 悲しい話ですね。

女2 まあね。でも、もっと悲しいのは、その合唱隊から夏の湯タンポにされてしまった私かもね。

クレオ きつと、いいこともありますよ。

女2 ええ、なんだかそう思えてきたわ。この指輪をしてるせいね。しばらく、このままハメていいかしら。いいわよね。カンターレンタンさんは、宝石のことは知らないんだし、この宝石はあなたのモノでもないんだしねえ。

クレオ いいのか、悪いのか、僕にはわかりません。

女2 カンターレンタンさんには、内緒にしておけばいいのよ。そうよ、そうするのがいいわ。誰だつて幸せになりたいものよ。だから、アルジャの男の兵士もナルジェの女の兵士も、ほんの一瞬のあいだに、垣間見たまぼろしの中で、幸せをみつけたのよ。夢をみることの権利は誰にもあるのよ。私にだつてももちろん、あつてもいいでしょ。

クレオ え、ええ。そう思いますけど。

女2 私、この指輪をしながら、ちよつと、夜の街を歩いてみるわ。きつと、どんな高級レストランのシャンデリアよりも、私のこの指の輝きは、まぶしいと思う。街の男も女も、立派な紳士も貴婦人も、私をみて振り返るでしょう。ああ、私、なんだか、ほんとうに、ダンスのひとつも踊りたくなくなつてきたわ。

いいつつ、軽く踊り始めた。

それから、クレオに手をふると、走って去った。

クレオ ああ、あの。ミズ、マンディ……。 (また、座り込んで) カンターレンタンさんには内緒にしておいたほうがいいな。

5

と、クレオ少年と同年くらいの男の子がやってきた。

男の子 クレオ。

クレオ ああ、パディオじゃないか。

パディオ いいのかい、こんなところでボウツとしていて。

クレオ 良くはないけど、どういうこと。

パディオ どうして、あんな不良娘に、街路燈のスイッチボックスの鍵を渡したりしたんだ。

クレオ なんで、それを。

パディオ あれは、札付きの不良だぜ。流れ者のヤクザの娘だ。

クレオ そうなのかい。

パディオ なんだ、知らなかったのか。

クレオ ああ、知らなかったけど、でも、その娘、なにかひどいことでも。

パディオ 街路燈の電球を、みんな壊しちゃったぞ。

クレオ ええっ、そんなあ。

パディオ 明かりを点けたあとで、石を投げて、電球を割ってしまったんだ。

クレオ 五つともかい。

パディオ ああ、五つともさ。

クレオ じゃあ、

パディオ 街の通りは、真っ暗さ。

クレオ ああ、なんてバカなことをしたんだ。あの娘を信用した僕がトンマだった。

パディオ こんな夜に、ひったくりや、人殺しでもあつてごらん。きつときみの責任になるよ、クレオ。

クレオ ねえ、パディオ、お願いがあるんだ。

パディオ 聞いてやってもいいけど。

クレオ 僕は、あの娘を捕まえにいく。鍵をとりもどさなきゃいけないから。だから、この荷物の番をしていて欲しいんだ。

パディオ これは、君の荷物なのかい。

クレオ いや、ここを寢床にしているおばさんのものだ。このオルゴールだけは、カンターレンタンさんのものだけだ。

パディオ 娘なら、もう、巡査のクルジエさんが捕まえたよ。

クレオ クルジエさんが。

パディオ 僕は塾があるから、もう行くけど、クルジエさんは、きっと、きみを捜しているに違いないよ。

クレオ　じゃあ、クルジエさんのところに、僕は行くよ。

パディオ　そうしたほうがいいよ。

クレオ　だから、お願いだから、少しの間、ここにいておくれよ。

パディオ　ほんの少しの間なら、いいけど。

クレオ　頼むよ。

パディオ　長くは、駄目だよ。塾があるから。

クレオ　僕だって、仕事が終わったら塾へ行くつもりだったんだ。だから、クルジエさんのところへ行つて、事情を話したら、すぐにもどつてくるさ。

パディオ　じゃあ、行つておいで。

クレオ　それから、このオルゴールは、カンターレンタンさんが、もどつてきたら、渡してくれないか。そのときには、きっと、螺子を返してもらうように。

パディオ　ああ、わかったよ。

クレオは、オルゴールをパディオに手渡すと、一目散に駆け去った。

パディオ　バカなヤツだなあ。(オルゴールの蓋を開ける)　なんだ、このオルゴール、ウンともスンとも鳴らないのか。あれ、(中をみた)

箱の蓋を閉め忘れていたらしい。

パディオ　なんだい、こりや、宝石じゃないか。ホンモノかな。(辺りをうかがつて、傍らのホームレスの荷物をみる)　ホンモノなら、きっと値打ちがあるに違いないな。これは(と紙袋にふれて)　ここを寢床にしてるおばさんの荷物だつていつてたな。きっと、街のあちこちにいる乞食女のひとりだな。よし、この女が盗んだことにしてやろう。(オルゴールの中の宝石をみんなポケットに入れると、走り去った)

6

オルゴールが、捨てられて途方にくれている動物のように、ポカンと蓋を開けたまま、街路燈の下に転がっている。

マチルダが、逃げるようにやってきた。

そのあとを、クレオと、クルジエ巡査が、歩いてくる。

マチルダは、暗闇に身を隠す。

クルジエ　そうそう、そのきみの友人の、パディオくんが知らせてくれたんだ。そこで、そのマチルダという娘を捕まえようとしたんだが、逃げられてしまったよ。

クレオ　パディオは、マチルダは捕まったといつてましたよ。

クルジエ　いや、捕まつてはいないよ。それに、その娘が街路燈の電球を石で壊しているところを私はみたわけじゃないんでね。その娘が犯人と決めつけるわけにもいかなのだ。だから、事情を聞いてみようと思つていただけなんだがね。

クレオ　パディオ・・・あれ、どうしたんだろう、パディオがいらない。ここで待つてくれる

ように頼んだのに。

クルジエ　ともかく、私は、マチルダを捜さなくてはならんからね。

と、遠くで呼び子が聞こえる。

クルジエ　おや、いま聞こえたのは、呼び子の音だな。また何かあったのかな。クレオくん、もし、その娘にあったら、私が捜していたと伝えておくれ。(去る)

クレオ　(オルゴールを拾い上げると) 空っぽだ。まさか、パディオのヤツ。

女3　そうよ、きっと、そのパディオがやったのよ。

クレオ　あつ、マチイ。いったい、何処にいたんだ。

女3　パディオは、クルジエ巡査になんていったと思う。

クレオ　鍵を返してくれ。

女3　もちろんよ。(返す)

クレオ　どうして、ひどいことをするんだ。

女3　ああ、あんたもそうなの。あたいがやったと思ってるんだ。

クレオ　電球に石をぶつけて壊してしまったそうじゃないか。

女3　そう、でも、やったのは、パディオよ。

クレオ　嘘をいうな。

女3　そうね、どうせ、信用してもらえないと思ってたわ。でも、私は、あんたに、こうやって、ちゃんと鍵を返しに来たわ。

クレオ　あたりまえだ。でも、街の通りは、真っ暗だった。

女3　パディオよ。あいつが、仲間と一緒にになって、あたいの灯した電灯を割ったのよ。

それをあたいのせいにして、クルジエ巡査にいつけたんだわ。この街の流れ者んところの不良娘がやったと、告げ口したのよ。

クレオ　嘘だ、嘘だ。

女3　オルゴールだって空っぽじゃない。そこに、宝石が入ってたんでしょ。

クレオ　どうして知ってるんだ。

女3　だから、いったでしよ、ずっとあんたのことみてたって。あんたと、おばさんが、ここで話してたことも、みんな聞いて知ってるのよ。

クレオ　じゃあ、どうして逃げたりしたんだ。クルジエ巡査は、きみのことを捜しているんだよ。

女3　あたいのいうことなんか、誰も信用してくれやしないわ。どうせ、流れ者の夫婦の娘だもの。それに、あたいには、前科があるしね。

クレオ　前科。

女3　街にサヨナラするとき、記念事業をやるのが、あたいの前科よ。

クレオ　僕はどうしたら、いいんだろ。

女3　ともかく、あたいは、あんたとの約束どおり、街路燈に明かりを灯したわ。それに鍵も返したから、これで、おさらばよ。せつかくこの街を離れるのに、警察沙汰はゴ

メンだわ。じゃあね。

クレオ　ちよっと待ってくれ。もし、ほんとうにきみが、犯人でないのなら、僕も証言し

てあげるよ。だって、きみに鍵を預けたのは、僕なんだから。これは、僕の責任かも知れない。

女3 いいえ、あなたにそんな責任なんかないわ。あなたは、やさしいひとなのよ。ちょっとお人好しだけれどね。あなたは、あたいの頼みを聞いてくれた。つまり、あたいを信用してくれた。一度信用してくれたんだから、いま疑られても、あたいはいいのよ。疑られるのは、あたいが悪いからよ。あなたはいいひとよ。でも、いくらあたいがいいひとだからって、一緒に警察に行くことはできないわ。あなたが善人なことと、あたいが悪人なこととは、ぜんぜんべつのことなんだから。

クレオ マチィ。

女3 あたい、今夜の記念が、いままでの中では、いちばんうれしい思い出になると思うわ。ありがとう、いいひとさん。(行こうとする)

クレオ クレオだ。クレオ・スカイワズナー。

女3 ありがとう、さようなら、クレオ・スカイワズナー。

と、またべつの女が旅支度をして、立っている。

女4 マチルダ。

女3 ママ。

女4 すぐにこの街を離れるよ。

女3 明日じゃなかったの。

女4 パパの都合で、大急ぎになったんだよ。

女3 パパはどうしたの。

女4 先にターミナルで待ってるよ。そのままでもいいから、すぐに私たちも行くんだ。

女3 パパ、また何かやったのね。

女4 何かって。

女3 だって、明日が急に今日の、しかも、これから夜よ。いったい、パパは何をしたの。街を出ていく記念事業に、何をしたのよ。

女4 何もしてやしないさ。

女3 嘘だわ。何か、ヤバイことがあったのね。

女4 (クレオをみて) この方は。

女3 クレオ・スカイワズナー。街路燈の明かりを灯すひとよ。

女4 お世話になったのかい。

女3 ええ、あたい、五つもこの街の街路燈に明かりを灯したのよ。このひとがスイッチの鍵を貸してくれたの。

女4 そりゃあ、良かったね。クレオさん、ありがとう。

クレオ いいえ、そんな、お礼なんて。それより、謝らなければならぬんです。

女4 謝るって。

クレオ 実は。

女3 いいのよ、それは。

女4 何かまた、ツイテないことがあったんだね。

女3 そうよ。パデイオっていうヤツが、街路燈の電球を仲間と一緒に石を投げて、みんな割ってしまったのよ。それをあたいのせいにして、巡査にいいつけたの。

女4 そんなもんだよ。ほんとうにいいことなんか、世の中にはありやしない。あるもんか。いいことがあったかなと思うと、次の瞬間には、時計の振り子もどるように、それは悪いことに顔つきを変えるんだ。いつも、私が教えてるとおりじゃないか。

クレオ 僕が、鍵なんか渡したから。

女4 そうだね、元はといえ、あなたのせいかも知れないね。この子に情けをかけてくだすったんだろうけれど、私たちのような人種には、情けは、いつも仇になるんだ。

女3 このひとを責めないでママ。

女4 責めてなんかいないさ。私の知ってる、ものの道理を説明してるだけだよ。

女3 クレオは、私のことを信用してくれたのよ。

女4 ああ、きつといいひとなんだろうね。でもね、マチルダ。いいひとがすることが、いつもいいことだとは限らない。もし、おまえが、このひとに、10キルト・コインの施し受けたと考えてごらん。10キルトを持ち歩いているおまえに、やってくるのは、それをおまえが盗んだんじゃないかという嫌疑か、あるいは、道端で擦れ違った掏摸に、10キルトを掏られるか、たむろしているゴロツキに、カツアゲされて、巻き上げられ、ついでに乱暴されるかさ。

女3 そんなことをいったって。

女4 現に、おまえは、街路燈を壊した嫌疑で巡査に目をつけられちまったんだろ。

女3 ママ。

女4 ごめんよ。ママがいい過ぎた。五つの街路燈に明かりを灯したことは、きつと、おまえの胸の中にもいつまでもいい思い出になって残るさ。たとえ、壊されてその灯が消えたとしても、おまえの心の中には、ちゃんと、五つ、明かりが灯ってるんだねえ。

女3 そうよ。そのとおりよ、ママ。だから、あたいは、なんにも悲しくないし、なんにも後悔してないわ。

女4 さあ、行くよ。そのおひとに、サヨナラはいったのかい。

女3 ええ。

クレオ ああ、僕がまだ、サヨナラをいってなかった。さよならマチルダ。もし、もっと早くに出会っていれば、僕たちはきつと仲のいい友達になれたと思うよ。

女3 そういつてくれると、うれしいわ。

と、マチルダの父親らしい人物が、急ぎ足で現れる。

男2 おい、グズグズしている場合じゃないぞ。

女4 あら、あなた、どうしたんだい、ターミナルに行ったんじゃないのかい。

男2 一駅先まで、馬車を使おう。そこから、汽車にするほうがよさそうだ。そう思っただけじゃなかったんだ。

女3 パパ、いったい何をやったの。

男2 何もしちゃいないさ。街を出ることは決まっていたことだろ。それがちよいと早まっただけじゃないか。

それから、男2は、クレオをうかがう。クレオは、小さくお辞儀をするが。

男2 (クレオの持つてるオルゴールをみると) おい、あんた、そのオルゴール、どこで手にいれなすった。

クレオ えっ、これですか、これは、預かりものなんです。

男2 ちよいと、みせてくれないか。

クレオ ええ、いいですけど・・・。

男2 (オルゴールをてにして、中を慎重にのぞきこむと) 空か。ちえっ、いったい、何処に隠しやがったんだ。ああ、どうもありがとよ。たぶん、知らないと思うが、おまえさん、そのオルゴールの中身の行き先をご存知かい。

クレオ 中身ってなんのことでしょう。

男2 そうかい、そうだな。おまえのような子供が知ってるわけではないな。

女3 宝石のことね、パパ。

男2 マチルダ、どうして、おまえがそれを知ってる。

女3 パパこそ、どうしてそれを知ってるの。

女4 宝石ってなんのことなのさ、おまえさん。

男2 ここで家族会議をしてる時間はないぜ。さあ、行こう。

女3 パパ。

男2 行くんだ。

三人、逃げるように足早に去る。

と、あちこちで、騒がしい声がする。

それは、こういつてる。

---カンターレンタンが河に浮いたぞ。

---カンターレンタンさんが殺されたぞ

---カンターレンタンがカムンズ河に死体で浮いたぞ。

7

遠くに呼び子の音。

同様に、走る人々の足音が往来して、遠くから聞こえる。

クレオ少年は、よほど、その場を離れようかと、思い悩んでいるのか、足が、いまにも駆け出しそうになるのだが、そこに、大声で何かわめきながら、男がやって来た。どうも、それは、その男の即興の詩であるらしい。

男3 ああ、私の探偵は

いま瑠璃色のカーテンのゆれる窓を指さし

月光の影に潜む犯人めがけて飛び出した
血に染まったベッドシーツは薔薇色に香りたち

黒き足跡のしるされた絨毯には風が吹き抜け
机の書類が 死に装束のごとくに舞い上がる

(クレオに気がついた) やあ、少年。なんという夜だろうね。(ウイスキーのポケット壺をあおる。酔っているのだ) 怪しむな。私は詩人という名の酔漢だ。ひとに危害をくわえたりはしない。おお、この街路灯は明々と電灯を灯しているではないか。少年、私は、この先の闇を歩いて来た。時間のとまったような漆黒の深遠を闊歩してきたのだ。

クレオ 時計、止まってたんですか。

男3 それは知らない。しかし、少なくとも、私にとつては、すべての時計の振り子はその振動をやめて、息をひそめているように思えたぞ。実に面白い夜ではないか。ここから先は明々と、神の御加護がある世界、ここから向こうは真(まこと)の闇が支配する。月もまた黒き雲に閉ざされて、垣間みせるは、河に浮かんだ死体の濡れた背中だ。

クレオ それ、カンターレタンさんのことですね。

男3 そんなことは知らない。誰が死のうと、私には、たいして意味はない。私にとって意味があるのは、このステキな夜だけだ。少年、きみは知っているか。私のためにやってきてくれた、聖なる夜を。詩人のためのベルベットの夜を。

クレオ 僕にはよくわかりません。

男3 わかりたまえよ。いや、わからずともいいか。いやいや、いまにわかる。きみもまた、一杯のグラスに注がれた琥珀の液体に身を沈めるときが来よう。そのときには、わかるはずだ。世界には詩が必要なのだとね。カール・ホップスはこう歌う。汝は太陽をみたか。直視すればおのずとその眼は焼かれよう。されど、月光は汝を誘うであろう、世界が持つもうひとつの顔を吐息をその影をして、悪魔にゆだねられし時へと。

クレオ 時計は止まっていたんですね。

男3 だとしても、気にすることはない。そういう夜が必要なのだ。ひとは日々の暮らしのために、汗水をたらして昼間の労働にいそしんでいる。しかし、そこには芸術というものはない。あるのは、プロレタリアートの愚痴で綴られたマガイモノの石膏細工だけだ。真の芸術は夜がつくる。流れる時は、ひとに、今日も昨日もまた明日も、変わりのない平穏な日々を約束するかも知れん。しかし、そんな人間にできるのは、せいぜい長生きだけだ。酔いたまえ。おおいに酔うべきだ。命こそ短くも、真理をみたく者こそが、芸術という甘露に酔うのだ。

クレオ 僕には、さっぱりわからない。

男3 光あれと、神がいったその瞬間に、闇と影ができたのだ。そこに自由という魔物が生息している。その魔物は退屈を食いながら、巨大な叡知を養うのだ。私は感謝しようではないか。そうすべきである、この夜に。おう、この闇に。霧のたれこめたるがごとく、この新世界に。(一息吸うと) ああ、私の探偵は、いずこに去りや、パイプの煙を残し、水晶の推理とともに。

何かわからない言語で、歌を口ずさみながら、男は去った。

クレオ少年は、うなだれてオルゴールを抱えるようにして、街路燈の下に座り込んだ。

そこへ、やっとあのホームレスの女が、ビニール袋を背負ってもどつてきた。

女1 眠っているのかい。

クレオ (顔をあげて) あっ、おばさん。

女1 どうしたい、泣きそうな面というのは、いまのおまえのような顔のことだよ。

クレオ カンターレンタンさんが、死んだそうなんです。

女1 来る道筋で、耳にしたよ。

クレオ 殺されたそうなんです。

女1 そんなふうになってたね。カムンズ河に突き落とされたんだってね。目撃者がいる

そうじゃないか。犯人は、一月ほど前からこの街にいる流れ者のゴロツキらしいね。

クレオ 流れ者のゴロツキ、それってほんとうですか。

女1 仲間にや、けっこう地獄耳なヤツがいてね、そいつの情報っていうやつさ。

クレオ 流れ者の、ゴロツキ。

女1 なんて夜なんだろうね。さっきもこの先の通りで、若い女が、ゴロツキどもによつ

てたかって、指輪を盗まれて大怪我をしたらしい。なんとかっていう劇場のコーラス

ガールだといってたね。

クレオ マンデイさんだ。

女1 知り合いなのかい。ともかく、この街にしちやめずらしく、あちこちで呼び子が鳴

って、巡査が走りまわっているよ。こんな物騒な夜ははじめてだ。

クレオ ああ、みんな、僕の責任です。

女1 おまえの責任。なにがおまえのせいなんだい。

クレオ カムンズ河の橋には、ことと同じ街路燈が、入口近くに立っているんです。きつ

と、そこも真っ暗だったに違いないんです。どこもかしこも、今夜は暗いんです。街

路燈に灯が入ってないからです。明るければ、人殺しなんか起こるわけがないし、カ

ンターレンタンさんだって、殺されずにすんだんですきつと。マンデイさんだって、

ああ・・・

女1 話の結びつきが私にや、よく飲み込めないが、要するに、面倒に巻き込まれたんだ

というんだね。

クレオ そうです。僕のせいです。

女1 悪かったね。私が荷物の番をさせなければ、おまえは自分の仕事の、街路燈廻りが

出来たろうに。

クレオ 明かりは点いたんです。でも、そのために、ああ、もうどう話していいかわから

ない。でも、なんだか、ひとつだけわかることがあります。すべては僕が、悪かった

ということですよ。こんなオルゴールに関わり合っていないで、街路燈の明かりを灯しに

いけば良かった。時計の螺子を巻けば良かった。僕がそうしなかったことで、運命が

狂ってしまったんです。ここにいても、僕にはみえるんです。壊れた街路燈と、振り

子が止まって、動かなくなった柱時計。振り子が止まってしまって、この街の何か、うまく動かなくなってしまうんです。それで、なにもかもが、おかしくなったんです。

女1 妄想は、誰もがもつ迷信だ。ひとは、そこから逃れることは出来ない。おまえも、いまその迷信の中に心を傷めているんだ。螺子と振り子とこの世界の話なんかしなきやよかったね。おまえには、さつき私から聞かされた話と、現実で起こった事柄とが、フランスの中で混じり合った液体のように、心の中で、ゆらいでみえているんだよ。それは、うまく混じり合わないで、まだら模様の毒ヘビのように、おまえの胸に噛みついたんだね。おまえの心はいま悪い映画をみている。きっとそうなんだよ。しかし、映画はやがて終わる。終わると劇場には電気が灯り、平穏な現実が訪れる。それまでの映画が、ただの作りごとでしかなかったことがわかる。ただの、悪夢のような物語であったことがね。

クレオ たしかなことは、もうなにもかも、手遅れだということです。遅かったんです。

女1 それが、おまえの責任だというんだね。

クレオ そんな気がするんです。

女1 もし、それがほんとうのことなら、おまえは、その責任というやつを感じていればいいさ。何かを成し遂げられなかったことと、成し遂げられたことが、世界の半分と半分を受け持っている。その何れにも、生きている限り、生きている者には責任というやつがあるだろう。成し遂げられなかったことで起こる悪い出来事もあれば、成し遂げられたことで生ずる悪い出来事だってある。ただ、責任はひとりにあるんじゃない。おまえが、電灯に明かりを灯せなかった責任は、私にだってあるんだから。そうして、そう私にさせたのは、スーパリーの棚卸しが運悪く、今日だったことなんだからね。おまえも私も、そんなつながりの中に、鎖の輪っかのひとつとしてぶら下がっているだけなんだよ。

クレオ ありがとうおばさん。慰めてくれてるんですね。

女1 いいや、単純に、そんなことをしているんじゃない。おまえは、おまえをここにしばらくつけておいた私のことを、少しも恨まずに、自分を責めている。それが間違いだということを正しているだけだ。とはいえ、私を恨んだところで、お前の苦しみは解決しそうにないようにみえるね。おまえは、要するに、自分ではどうすることも出来ないゴタゴタに巻き込まれたようだね。

クレオ ええ、知らないあいだに、そうなってたんです。だけど、それが、ぼくには、このオルゴールに突き刺さったままの螺子と、それがせいで止まってしまったと思える時計の振り子のせいのような気がしてならないんです。街に流れていた正常な時間が、ぼくのせいで台無しになったんじゃないかと。

女1 やれやれ、今夜のおまえは、いろんなことを学習し過ぎたね。いちどきに、人生で起こるさまざまな、逃れられない苦難というヤツの多くを、ミックスジュースにして、コップいっぱい飲んでしまったようだね。簡単にいってしまえば、おまえは今日、いろんなものに数多く出会い過ぎたんだよ。しかし、覚悟するなら、毒を食らわば皿までもということもできる。おまえは、この夜この時のことを生涯忘れないで、おまえの生きる道筋の標のひとつとして、心に深くしまっておくことも出来るだろう。勇気

をお出し。教えたとおり、螺子もどるときのエネルギーはコントロールしにくい、まったくの無茶苦茶をするというものでもない。

クレオ おばさんが、ここを去ってからのことを、順繰りにくわしく説明する気力というやつも、いまの僕にはないみたいです。ただ、わかってもらえるかどうか、ほら、オルゴールのからくり箱にあった宝石は、ひとつ残らず無くなってしまったんです。

女1 なるほど、それだけ教えてもらえば、充分さ。おまえの苦難もわかるうというもんだ。私もう少し、早く帰ってきていていけば、その苦しみも半分ですんだらうに。せめて、その螺子をオルゴールから、抜いてやることぐらいのことが出来れば、詫びの代わりにもなるうと思うが、さて、貸してごらん。

クレオ 螺子がぬければ、時計の発条が巻けますから、また振り子も動いてくれると思います。そうすれば、この街の時間だって、また正常に。

女1 (オルゴールの螺子と格闘し始める) だから、それはおまえの作り上げた迷信だというんだよ。この街の全ての時計の振り子が動くのをやめているワケがないじゃないか。街路燈の時計だって、すぐに振り子が止まるわけでもなかるうに。

クレオ でも、僕の心の中では、

女1 ああ、それはよくわかったよ。もう、そんなふうにするのはおよし。といっても、いったん思い込んだものは、凍った水だ。その氷を砕くくらいのハンマーが必要だね。ハンマーといえば、この螺子も、ハンマーがいるね。

クレオ そんなもの持ってやいません。

女1 ここにもない。

と、男がメモを片手にやってくる。

男4 あの、坊やはクレオさんというのではありませんか。

クレオ ええ、僕はクレオですが。

男4 ああ、良かった。ここでいんだ。実は、カンターレンタンさんに、ああ、ご存知です、ね、カンターレンタンさんを。

クレオ 知ってます。

男4 そう。カンターレンタンさんは、酷いことになりましたが、その事故が起きる前に頼まれたことがあったんです。私は、街はずれで、機械細工を営んでいる者です。なんでも、オルゴールに差し込んだ螺子が抜けなくなるとかで、ここへ行くようにいわれたんです。すぐに来れば良かったんですが、手の離せない仕事の最中だったものですから。

クレオ そうですか。

男4 間違いありませんね。ここで。

女1 やれやれ、ハンマーがやってきてくれたようだね。

クレオ ええ、そのオルゴールというのは、これです。

男4 どれ、ちよいと拝見。ああ、こんなものですか。これなら、すぐにカタがつきますよ。(と、道具を出して、簡単に螺子を抜いてしまう)

クレオ あっ、とれた。

男4 これで、よござんしよ。

女1 さあ、じゃあ、お行き。時計の螺子を巻いて、振り子をゆらしてくるんだ。やっと、おまえの出番だね。

クレオ はい、すぐに行きますとも。

男4 ついでといっちゃ、なんですけど、電球がみな消えていたようなので、よければ、私が新しい電球とつけかえましょうか。

クレオ できるんですか。

男4 それくらいのことには、出来ます。電球がきれることなんざ、よくあることなので、

新品の電球は、持ち歩いてますから。

クレオ じゃあ、僕と一緒に来てくれますね。

男4 ええ、お供いたしますよ。

女1 ああ、クレオ、お待ち。

クレオ えっ、まだ何か。

女1 おまえは、こんな乞食女のいうことを守って、よく荷物の番をしてくれた。そのお礼をしよう。(と、紙袋から一冊の本を出す) これをおまえにあげよう。

クレオ (受け取って、タイトルを読む)・・・プリンキピア。

女1 その本がおまえの役にたつのかたないのか、そこまでは、私にワカルことじゃあないが、せめての、お礼だよ。それは私が若い頃によく読んだ本だ。

クレオ ありがとうおばさん。大切にします。

女1 お行き。

クレオ はい。

ふたり、街路灯をあとにした。

女1 クレオ、汝の未来に幸あらん。自らを愛せ。真理を愛せ。

1 9 9 8 / 0 2 / 2 6
2 0 1 2 / 0 5 / 3 0